

△研究ノート▽

『三宝絵』 東大寺切 翻字解釈三題

A Study of Reprint in San-pou-e's Toudaijigire

高橋 宏 幸

TAKAHASHI Hiroyuki

はじめに

此の度、『三宝絵』の「名古屋市立博物館本（関戸家旧蔵本）」（以下、『名博本』と略称する）と「東大寺切」の翻字・翻刻を見直す機会があり、『名博本』の影印本と、小松茂美博士の『日本名跡叢刊91』・『古筆学大成』、その他、諸氏の著書・論文・展覧会図録等の写真により確認できた「東大寺切」一〇九葉（内、一〇葉は写真が『入札目録』等の掲載だけなので未見）と諸氏の手による翻字・翻刻とを見比べた。その結果、それぞれに誤植・誤読が相当数見つかり、春日和男博士が関戸本の翻字を三度修正なさったのも宜なるかなの感を抱いた。

その過程で考えた次の三箇所について私案を記してみたい。「東

大寺切」の番号は、各氏著書掲載以外は『名古屋市立博物館 三寶繪 写真版』（名古屋博物館・平成元年九月刊）別冊の『解説・翻刻版』付載「『三寶繪』（冊子並に東大寺切）残存一覽」（高橋伸幸作製）によった。

（一）上巻第十二話「はわ」

「上巻第十二話・須太孿太子」の「東大寺切」、その残存第五葉目、切番号22について『諸本対照 三寶繪集成』（笠間書院・昭和五年六月刊・65p）では、次のように翻刻している。

にみなわかれなむとすよろづのことつねな
 しいつれをもたのむへからす我ほとけとなり
 なむときおのつからまさにみちびかむと
 こしらへてしひてさづけつれともなほは、
 かおもてをもみずしてなかくわかれむこと
 をかなしひわかなに、よりてかおそくかへり
 たまふらん我いまさりなんとすはやくき

この「切」は、【笥記】によると、『香雪齋山内氏第二回・初山髻
 吉氏藏品入札目録』（昭和二年・東京美術倶楽部）に依つて翻刻し
 たもので、山田孝雄博士がすでに「国語国文」第廿二卷第十二号に
 翻刻されているものである。

該当部分について他の諸本の本文を見ると、（／は行替の位置）

『前田本』（二七才）

終皆得別。万事无常。何々非可馮。成仏之時、自得導度教／
 誘、授、猶悲、不見母面、長悔、我母、何因今日遲帰給。我今
 欲去。早來

『観智院本』（三七ウ）

遂二ハ、皆長ク別レナムトス。万ツノ事、／常无シ。伊ツ礼
 ヲモ、可馮キニ不有ス。吾レ仏ニ成ナム時ニ、自ラ、／將ニ
 引導ス、渡サムト教ヘ、誘ヘテ、強ヒテ授レトモ、猶、母カ面
 ヲ、不見／シテ、永ク別レム事ヲ悲ヒテ、吾カ母何ニ、依テ

今日シモ遅ク／返り給フ。吾レ、今去ナムトス。早く來テ、
 相見給ヘト泣キテ臥シ
 となつてゐる。

『東大寺切』に句読点、濁点を施してみると、

（つる）に、みなわかれなむとす。よろづのこと、つねな
 し。いづれをも、たのむべからず。我ほとけとなり
 なむとき、おのづから、まさにみちびかむと
 こしらへて、しひて、さづけつれども、なほ、は、
 がおもてをも、みずして、ながくわかれむこと
 をかなしび、わがなに、よりてかおそくかへり
 たまふらん。我、いまさりなんとす。はやくき

となる。

ここで問題にするのは、六行目の「わかなに、」の右傍に書き入
 れてあるひらがなの翻刻についてである（【図版1】参照）。山田
 孝雄博士は空欄を二つ記し翻字していない。『諸本対照 三寶繪集成』
 では、「は、」と翻刻している。伊井春樹博士（『古筆切資料集成
 卷四』284 p No. 17・思文閣出版・平成二年）も同じである。しかし、
 小松茂美博士（『日本名跡叢刊91』33 p・二玄社。『古筆学大成』
 第二十五卷165 p No. 207 釈文19・講談社・平成五年刊）は、両著とも、
 「り」と二字目を空欄にし、二字目は「り」と翻刻している。

『香雪齋山内氏第二回・初山髻吉氏藏品入札目録』（未見）の写
 真では剥落が少なかったのか、それに依つた『諸本対照 三寶繪集

成』と伊井博士の翻刻には空欄がない。山田博士は原本に依られたのか、転写本によられたのか、あるいはどなたかからの報告に依られたのか不明だが、その翻字には空欄あるいは仮名を罫線で囲んだものが多く、また、小松博士の翻刻ではさらに増えている。『日本名跡叢刊91』の写真には「個人蔵」とあるので現在の状態であろうが、その剥落している様から納得するところである。

いま、『日本名跡叢刊』の写真とそれら翻刻とを見比べてみるに、一字目は剥落して最終画の一部しか判読できないが、二字目は、同じ「は、」の書き入れのある『名博本』七四オ2の形と比べて観るに、少なくとも踊り字には見えない。一見すれば、小松博士の翻字のように「り(利)」と見える。確かに次行の「さりなむ」の「り」とよく似ている(【図版1】参照)。

ところが「り」では、一字目がなんであろうと、『前田本』および『観智院本』の本文と合わないのである。『前田本』は「我母何因」、『観智院本』は「吾カ母何ニ、依テ」とある。この本文と対照するなら「わか」 「な、」よりてか」の空欄に補入される言葉は「はは」でなくてはならない。それが念頭にあって『諸本対照三寶繪集成』と伊井博士は「は、」と判読なさったものであろうか。しかし先述したように二字目は「、」に見えないことは確かである。

そこで考えられるのは、二字目は「わ(和)」ではなからうかということである。二字目が「わ」なら、一字目は残った筆画から『名博本』七四オ2の「は、」の「は」(字母「者」)と似ているので「は」、すなわち「はわ」という、亀井孝氏の言う「おとをなかだちと する かたちの ことに ついてのみ いう ものと する」¹⁾「ことば」に当たる語形であろう(亀井孝「ハワからハハへ」

『日本語のすがたどころ(一)』論文集3。177p。「はわ」という「ことば」の用例は、今まで『元永本古今集』(元永三年1120写)八六二番歌を初めとして『法華経单字』(保延二年1136写)5オ「母ヲヤ ハワ」、知恩院蔵『上宮聖徳法王帝説』院政期点「母」・西南院蔵『仮名書き往生要集』治承五年頃写本「はわ」(「母」の単独全四例すべて。以上二書、西崎亨博士『高野山西南院蔵往生要集断簡』和泉書院による)、毘沙門堂本『古今集注』八八五詞書「ハワ」^{ワトヨム}、『古今訓点抄』序「チ、ハ、ノ」^{ワトヨム}、天理図書館蔵『古文孝経』正安四年(1322)点「母」二例(西崎亨博士『訓点資料の基礎的研究』三三三頁・思文閣出版)、そして中世末には、『羅葡日対訳辞書』ではすべて「Faua」、『日葡辞書』にも「Faua」[Bogui Faua]「Caca Faua」など標出語ばかりか、言い換え語としても用いられている例が知られていたが、ここに保安元年1120写の「東大寺切」の用例を追加するものである。これら資料の多彩さからも「はわ」という語形が「ことば」として普通に存在していたことは証せられるものと思う。

問題は「わ」の字体である。「わ」は、上巻の「東大寺切」には『古筆学大成』第二五卷No.180〈上巻第4話〉5行目・8行目、No.212〈上巻第13話〉7行目、No.214〈同〉1行目、雑誌「求美」30号〈同〉2行目、など数例集中して見られる程度で、中巻の『名博本』でも「わ」には多く「和」の草仮名程度の書体が用いられている。しかし、「わ」も二ウ6・四オ4・一三オ2・三四オ5・三七オ3・三九オ4・四三ウ6・五七オ2・六二ウ6・六三オ7・七二オ5・七三ウ4などに散在している。ところが、下巻の『名博本』および「東大寺切」ではほとんど「わ」の字体が専用されるほどである。

傍書は全巻書写し終えた後に見直しの段階で書き入れたものである
 う（馬瀨和夫「『三宝絵詞』の草稿本、東大寺切・関戸本について」
 ・『古典の窓』大修館・176^p）から、この「はわ」の書き入れは下
 巻からの流れで「わ」の字体を用いたものと考えられる。このよう
 に、全巻一筆であつても、巻を追うに従い仮名の書体に変化が生じ
 るということを考慮する必要がある。

（二）中巻第一話「なにはのつあり」

『三宝絵』に絵が存在したこと、その証拠として安田尚道氏によ
 り発見報告され（『三宝絵詞』（東大寺切）の絵解の部分について
 〈全国大学国語国文学会研究発表会・昭和五十二年春季大会・昭
 和五十二年六月四・五日 青山学院大学〉）、その後、「三宝絵」
 （『国文学 解釈と教材の研究』四十七巻十一号・昭和五十七年十一
 月）・「三宝絵の絵と絵解き」（『一冊の講座 絵解き 日本の古典文
 学3』有精堂出版・昭和六十年九月）に詳論されたのが次の「東大
 寺切」二葉である。

その「研究発表要旨」に、連続する「切」として、【第一葉】は
 田中親美『まつかけ』（昭和三〇年ごろ）から、【第二葉】は『当
 市（鷹半）中村氏旧蔵品目録』（大正四年十二月十三日・京都。原
 寸の約十三分の一の写真）に依つて次のように翻字された。

【第一葉】

りてなり又上宮太子と申すすいこ天王の
 御よに太子を王宮にすませたてまつ
 りてくにのまつり事をしらせたてまつ
 つるによりてなり日本記平氏撰聖徳
 太子伝（マ）上宮紀（マ）諾楽（マ）右京薬師寺沙門景夷（マ）撰
 日本国現報善悪靈異記（マ）にみえたり
 太子の御まゆのあひたにひかり

【第二葉】

をはなちておはしますすひかり
 をはなつ人をかみたてまつる人く
 のそきて見るなにはの□なり
 又た、かひつる所に太子おはし
 ますもりやきよりおちにたり
 そなたのいくさみなふしにき
 又おまへにて太子経をかうし

（安田氏手沢校正「要旨」による）

その後、『諸本対照三寶繪集成』には【第二葉】を久曾神昇博士御所蔵の写真のコピーにより翻刻された(一一七頁)。

安田氏は「三寶絵詞」東大寺切とその本文(二二)〔青山語文〕第十二号・昭和五十七年三月)において、【第二葉】を久曾神昇博士御所蔵の写真により再度翻字し直された。

【第一葉】

りてなり又上宮太子と申すすいこ天王(マヤ)の
御よに太子を王宮にすませたてまつ
りてくのにまつり事をしらせたまつ
つるによりてなり日本(マヤ)記(マヤ)平氏撰(マヤ)聖徳
太子傳(マヤ)上宮紀(マヤ)諸楽右京薬師寺沙門景夷撰(マヤ)
日本国現報善悪靈異記(マヤ)にみえたり
太子の御まゆのあひたにひかり

【第二葉】

をはなちておはしますひかり
をはなつ人をかみたてまつる人く
のそきて見るなかにはのつあり
又た、かひする所に太子おはし
ますもりやきよりおちにたり
そなたのいくさみなふしにたり
又おまへにて太子経をかうし

久曾神昇博士は、その著『物語古筆断簡集成』(汲古書院・平成十四年一月)に【第二葉】をほぼ原寸大で掲載された。宮田裕行氏は安田氏等の研究を踏まえ、『三寶絵詞』断簡二・三について「『文学論藻』第七十七号・平成十五年三月)で、「贋作であることは明らかである」とされたが、「聖徳太子の条をよく理解したうえで、適当に作文したものと考えられる」、「本文は下巻(マヤ)一の聖徳太子の条の内容を十分理解した者の手により作文されたもので」と感じられたように、これは、中巻第一話の内容を絵にした、その絵の説明の文章で、安田氏の言う「絵解きの文」(宮沢俊雅氏の見解によるという)であることは間違いないと考える。

安田氏は、前記二論文で、先ず「第一場面」(後述の増成氏論文)にあたる部分のうち、【第二葉】の一行目から三行目「ひかりをはなつ人をかみたてまつる人…のそきて見る」の句読・解釈について

諸案を示された。

(1) 光を放つ人(日羅)。拝み奉る人々(民衆)。(その光景を別の人々が)のぞきて見る。

(2) 光を放つ人(日羅)、(太子を)拝み奉る。(その光景を)人々のぞきて見る。

(3) 光を放つ。人、拝み奉る。人々のぞきて見る。

「東大寺切」のこの箇所は、『名古屋市立博物館本』でいえば次の本文の部分に該当するところである。

百さいこくより日らといふ人きたれり。身にひかりあり。太子みそかにわろき、ぬをきてもろくの^①わらへにましりて^②難波の^③たちにいりてみる。日ら太子を見てあやしふ。太子おとろきてさる。日ら^④つちにひさまつきてたな心をあはせていはく、敬礼救世観世音、伝灯東方粟散王とまうすほとに、日ら^⑤おほきに身のひかりをはなつ。太子またまゆのあひたよりひかりをハなちたまふ。

(10オ7行目〜11オ3行目)

なお、参考に、『観智院本』の本文(7オウ)を掲げる。

百済国ヨリ日羅ト云人來レリ。身ニ光明アリ。太子竊ニ弊^{ヤツレ}タル衣ヲキテ、諸ノ童ニマジリテ、難波ノタチニイタリテミル。日羅太子ヲサシテアヤシブ。太子オドロキテ去。日羅ヒザマツキテタナ心ヲ合テ云ク、敬礼救世観世音、伝灯東方粟散王。ト申スホドニ、日羅大ニ身ノ光ヲハナツ。太子又眉間ヨリ光ヲ放給。

この東大寺切の「絵解き」の部分と『三宝絵』の本文①〜⑤とを結びつけて、句読・読解すると、

○太子の御眉の間に光を放ちておはします、

⑤ 「太子またまゆのあひたよりひかりをハなちたまふ」(日羅太子、また眉の間より光を放ち給ふ)の絵画化

《太子の》と「の」があるから、「おはします」は連体形で「おはしますスガタ(ヲ)」の意であろう。なお、安田氏の書写状態説明に「あひたにひかり」の「にひ」は一旦「より」と書いた上に「に」(耳の草体)ひ」と重ね書きしたものであるとある。重ね書きの下の「より」は、『三宝絵』の本文に、

「太子またまゆのあひたよりひかりをはなちたまふ」(11オ)

「太子まゆのあひたよりひとつのしろきひかりをはなちたまふ」(17オ)

とあることから、語から思い込みで次句に筆が流れる癖(馬淵博士の、前引の論文で「上からの続きで思い誤りの誤記」という意味で用いる「予想誤記」と同じ意味)のある書写者は「放ちて」という動作性述語を念頭に「より」と書いてしまったものである。しかし、ここは「おはします」という静的な絵の説明であることから「に」と書き直したものと考えられる。

○光を放つ人(日羅)(ガ)、(太子ヲ)拝み奉る。

④ 「日らおほきに身のひかりをはなつ」(日羅、大きに身の光を放つ)

③ 「日らつちにひさまつきてたな心をあはせて」(日羅、土に

跪きて掌を合はせて)

の絵画化(《安田氏の第2案に当たる句読である》)。

○(ソノ様子ヲ)人々(童)(ガ)覗きて見る。

①「わらへにましりて」(童部に混じりて)の場面を含めた絵画化

《日羅が来朝したことを聞いて聖徳太子は弊衣を着て童部に混じって見たわけだから、その場には「人々」すなわち「諸ノ童」がいて、それらが眉間から光を放つ太子とその太子を全身から光を放ちながら拜む日羅を、周囲から重なり合って覗くように見ている光景であろう》

問題は次の「なかにはのつあり」で、安田氏は『三宝絵詞』東大寺切とその本文(二)で、この箇所の手写状態を詳しく説明された(【図版2】参照)。

(a)三行目の下から3字目の仮名は、名古屋古筆研究会の資料では「なかにはのべあり」と読まれているが、意味が通じがたく、「つ」とすべきか「へ」とすべきか字形からは決められないこと、(b)「なかには」の「か」は可の草体であるが、上の「な」から続いた筆が「可」の草体の第二画に続いていて、第一画の「、」は後から書き加えたように見える事を指摘し、

東大寺切においては、可の草体は「の」のように一筆で書く場合が多いのであって、わざわざ「、」を加える必要はなさそうなものである。「、」が文字の一部なのか、あるいは墨の汚れなのか、原本によって確かめる必要がある。

と、拡大写真を載せて説明された。また、前引の「三宝絵」(『国文学 解釈と教材の研究』四十七卷十一号)・「三宝絵の絵と絵解き」(『二冊の講座 絵解き』有精堂出版)でも、

「なかにはのつあり」と翻字したが、「つ」は「へ」とも読める。しかしいずれにしても意味が通じ難い。何らかの誤写があるであろう。

として、犬飼隆氏から示された「中に函の一あり」という解を、「疑問が残るが、…一案として尊重したい」とされた。

馬淵和夫博士は「三宝絵詞の草稿本、東大寺切・関戸本について」(『説話』九号・一九九一年。『古典の窓』大修館・一九九六年所収)で、この「未読解」の部分について「思い付きを記しておく」として、

人々のぞきて見る中庭の絵ありと解し、

「中庭」は問題ないとして、「へ」を「系」の仮名遣いのまぢがいとするには多くの弁解がある。…語中の/e/の音が/ue/の音に代わったことは当時すでに一般的であったから、「へ」を「系」の音に当てたという解釈は許されよう。

(一七〇頁)

(川口久雄博士の)『源氏物語への道』ペ二四七に、「絵」を「へ」と書いた『宇津保物語』の例が挙がっていた。本論一七〇ページの論の傍証となるかどうか。

(二〇五頁)

と説明された。増成富久子氏『三宝絵』東大寺切における「絵解き」部分の性格(『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院・平

成7年)も同様に考え、「難波の館の中庭」と解された。

しかし、童部や太子は「難波の館に入りて見る」(前田本も「入難波館見」だが、観智院旧蔵本の「イタリテミル」が適當か)であり、日羅が太子を拝んでいる場所が「館の中庭」という記述はない。結局、どの説でも「意味不通」で、『三宝絵』本文の記述と必然的関連性が認められないのである。以下、前引の安田氏の書写状態の説明(a)・(b)を踏まえて私案を述べる。

(b)「つ」と「へ」の字形について、馬淵博士は、

「つ」の字ならば「津」をくずした字形が普通であり、他と比べて「へ」と読むべきである。(一七〇頁)

とされるが、『名博本』で多く用いられているのは「徒」を崩した字形であるが「つ」の字形も用いられていないわけではない。ただ、上巻から中巻にかけて、名古屋市立博物館蔵「東大寺切」(上巻第八話)6行目「みつから」、小松博士『古筆学大成』No.181(上巻第五話)の5行目「つねに」などの極少数例以外は、「川」に近い草仮名が六九丁オモテまで、そう多くはないが用いられ、下巻にあたる七六丁オモテ(二四丁オモテ)二七丁ウラは八二丁ウラの後に続く部分である)から「つ」の字体が「徒」の草体と併用されるという偏りが認められる。下巻では「つ」の方が多く、例えば「東大寺切」No.188では九個すべて「つ」である。馬淵博士は、『名博本』の筆者は「芸術的な草仮名に書き慣れた者」(二七九頁)とされるが、この変化を考え合わせると、底本の字体に則して書き写していた筆者が次第に画数の少ない「自」の常用字体で書記するようになっていったとも考えられる。絵解きの部分は底本に無く書き足したものとすれば常用の「つ」が用いられていることの説明がつく。なお、「つ」

と「へ」の字体の違いは、例えば『名博本』七六オ3「真言をつたへて」、あるいは『日本名跡叢刊91』三九頁3行目「なつけたてまつるへしといへり」、四一頁5行目「つゝめつへけれ」、四三頁2行目「すつへからす」などを観ると曲がり方の形が異なるが、二七頁5行目「みるへき」、二九頁3行目「まへに」などを見ると、上記の「つ」と同様な形と見なされるほどである。『名博本』四七オ7「やのうへに」では「つ」のような「へ」の上に「へ」と重ね書きをしている。また、八〇ウ2「のりのころもまつへるに」では「つ」の右傍に「徒」の草体を書き入れてあるのはあまりに似ているためであろう。つまり「つ」と「へ」を接近して記すときは異なる形に記そうとするが、単独だとほとんど変わらない形で記すのである。故に、安田氏の言うように、「つ」とも「へ」とも読みうるのである。

(a)「ka」の仮名には「果」「加」「可」(への)のように一筆で書くものと、その上に点を付ける「二体」の崩しの四体が用いられていて、変字法かと思われる用法以外、機能的な使い分けははっきりとは認められない。故に、安田氏の言うように、筆は「な」から「の」のように一筆で書く「可」の草体に連綿している、その途中にわざわざ「、」を加えた「か」にする必要はないのである。『名博本』において、「なかに」と仮名連続する箇所は一四箇所ある。そのうち一〇例が「奈可尔」「可」は「の」のような字体)の崩しで、「可」に点を付けた崩しの字体は五八オ7の一例だけである。

そこで、この「、」の意味を考えるに、これはミセケチの記号ではなからうか。本書のミセケチは、漢字の「止(ヒ)」、記号の「、」「、」などを文字の左・右・上に記していることについては『名博

本』の複製の別冊「解説・翻刻版」二六頁凡例に、小泉弘博士が記すところであり、馬淵博士もその段階的使用を指摘された（『古典の窓』一七六頁）。ミセケチの多くは文字の左傍にチョンチョンと二点記すが、一点を文字の上あるいは左傍に記す場合もあり、『名博本』一ウ2・二五ウ7・三八ウ2・五一オ2・五四オ4などにその例が見える。すなわち、ここは「か」をミセケチにして「なには」としたもので、「難波」の意である。なお、本文においては「難波」と漢字で記す箇所（一〇ウ3）、既に撥音化していたのか（『新日本古典文学大系』では「なんば」とルビを付している）、「なは」と記し（一三オ5・五〇ウ6・東大寺切No.47〈中巻第三話〉に二例）、「なには」と記した例はない。

以上の検討により、この一文は「なにはのつあり」と翻字し、「難波の津あり」の意と解するというのが私案である。『観智院旧蔵本』に「攝津國ノ難波ノ津ニ」（中巻・21ウ）、『名博本』に「こしをつるかのつにゆきて（||越の敦賀の津に行きて）」（52ウ4）、『観智院旧蔵本』「越前國敦賀津ニユキテ」（中巻・35ウ）という例もある。

『三寶絵』の本文に、太子が童部に混じって日羅を見に行ったのは難波の館（継体紀六年二月初見、敏達紀二二年是歳に「難波館^{ムロツミ}」とある迎賓館）とある。そこで「太子の、御眉の間に光を放ちておはします、光を放つ人、拜み奉る。人々、覗きて見る」という場面が描かれたが、そこに「館」の絵（俯瞰式に描かれていたか）だけが描かれていても難波とは分らない。そこで、海岸や港が描いてあって、この場所は難波の港があるところだ（「なにはのつあり」という絵解きの詞になったものと考ええる）。

なお、馬淵博士は「有絵・ゑあり」について、「草稿本」「下書き本」を想定し、「絵についての為憲の指示」・「為憲の絵に対する注文が書かれていた」・著者「源為憲の意思表示ではないだろうか」とされ、それを踏まえて、増成氏はこの「東大寺切」の文章は「描かれている絵に対する説明ではなく、描くべき絵の要素」「や場面を述べたものである」とされた。これは、今までは描かれていた絵柄を解説した詞と考えられていたのに対し、これから描く絵の要素・場面を記した文ということになる。しかし、馬淵博士・増成氏のように「中庭の絵あり」と解するならば、絵画化の指示に「あり」という言葉は合わないだろう。

なお、『宇津保物語』において従来の絵解き説に対して、描くべき絵の要素を記したものであるとする絵指示説（中野幸一博士「新編日本古典文学全集」解説）がある。「ここに」「ここには」「ここは」などという記述からは絵指示に思われるが、「これは」という言葉からは絵解きとも考えられる。また、「複本文」という観点からの読み方も提唱されている（室城秀之「うつほ物語の表現と論理」若草書房）。いずれにしても、ほぼ同時代の作品の有り様として、合わせ考えるのも一つの視点だろう。

（三）中巻第十三話「尼寺」―「にし」―「西」

馬淵和夫博士が前記論文の中で、『名博本』「東大寺切」の本文が「内容の正確性はあまり期待し難い」として論じた、その冒頭に山田孝雄博士が『三寶繪略注』所収「三寶繪詞の研究」で「東大寺切

は大體正しいものと思はるゝが、又往々如何かと思はるゝところもある」として掲げられた三点を引用なさっているが、その第二点は、置梁臣鯛女はならの西のさうさのあまの娘なり（中巻・第十三話・四八ウ）

で、それについて、山田博士は、

「西のさうさ」といふことは誤で、靈異記には「奈良京富尼寺上座尼法邇之女也」とあり、前田本は「奈良尼寺上座之女也」とし、東寺本は「ナラノ尼寺ノ上座ノ尼の娘也」とある。「尼寺」といふことが無くてはならぬ筈である。

(四二〇頁)

(二七七頁)

とし、

東大寺切は不備なり。

(四二〇頁)

傳写の際には知らずしてか、若くはよみ違へた爲と思はるゝとされた。馬淵博士は言うまでもないとお考えか、引用されただけで、そのような本文になった理由について述べておられない。これは家兄伸幸が担当した、『諸本対照 三寶繪集成』本文篇の【笱記】に、

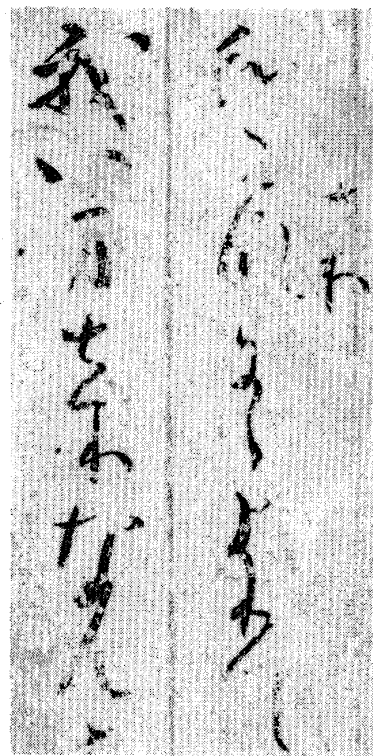
「西の」は「にし（ニ尼寺）の」に誤つて漢字を宛てたもの。

(二八〇頁)

と説明するとおりであろう。後に、小泉弘博士も『名博本』の「翻刻版」脚注に「底本の『西』は、尼寺の仮名書『にし』に『西』の字を宛てたか」と記されている。すなわち、馬淵博士の御説（『古典の窓』一七四頁、『新日本古典文学大系 三宝絵 注好選』

五二二頁）に沿つて考えると、漢文乃至変体漢文で記された「草稿本」に《尼寺》と記されていたのが、平仮名文(章仮名文)の「下書き本」において《にし》とされ、それに『名博本』の段階でか《西》と漢字を宛てたため、「尼寺」という語が「無く」なつてしまつたものであろう。これは、前述した巻による仮名の字体(字母)の変遷と合わせ、『名博本』『東大寺切』の本文書写あるいは現表記の性格を物語る例と思われる。

【図版1】 『日本名跡業刊』91より



【図版2】 (久曾神昇博士『物語古筆断簡集成』より)

